

子ども・子育て支援研究センターで活用する
フレーベルの「遊戯」と「教育遊具（教具）」
——実践への手引き（2）：作業具を中心として

小笠原 道雄*

A Study on the Utilization of Fröbel's "Play" and "Teaching Tools" in Children
and Child-Rearing Support Centers : In Consideration of Their Practically (2):
Working-Tools" ("Spiel-und Beschäftigungsgabe")

Michio OGASAWARA

Fr. Fröbel has been called "the Father of Kindergarten" because he founded a kindergarten in Germany in 1840 as the first one all over the world. Before the foundation, however, he invented "teaching tools" with which children and their mothers or care-givers would play together, in inquiring into principles of human education for fostering children's autonomy. He continued to invent "teaching tools" up to his later life in explicating the principles theoretically and practically. In other words, he invented educational materials, that is, "teaching tools" to use in a kindergarten as a "place" for care-giving before its foundation, and considered that the utilization of the tools at home, in kindergarten or in school would make possible human education that fosters freedom and independence. Why did he find significance in "play" and invent "teaching tools" that rely on no letter? This study answers the question in considering the practically relations of his "teaching tools" and provides examples of utilizing the tools in children and child-rearing support centers. According as the consideration of their practically study (2) is it to make uncovered the "teaching tools" ("Spiel-und Beschäftigungsgabe") and to explore the whole idea of his book for child care in home and Child-Rearing Support Centers.

キーワード：Fr. フレーベル Fr. Fröbel、教育遊具 teaching tool、遊び play、幼稚園 kindergarten、子ども・子育て支援研究センター children and child-rearing support research center、作業具 working-tool ("spiel- und beschäftigungsgabe")

* 広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科
Hiroshima Bunka Gakuen University Faculty of Arts
and Sciences Department of Childhood Studies

スローガン

一体、小さな子どもたちの遊びとは何でしょうか？——それは、子どもの生活の小さな始まりにすぎませんが、生活そのものにとって偉大なものなのです。ですから、ただただ楽しく、大喜びで遊んでいるにすぎない場合でも、そこにはつねに、見とらしされた高貴な真剣さが、力づよく、十分に現れているのです。

(フリードリヒ フレーベル、1835年)

教育にとって第一に問題なのは、子どもの人間形成にふさわしい素材（教具）を与えることでなければならないのです。

(ヨハネス プリュウファ著『フレーベル』(1927)より)

はじめに

Fr. フレーベル (Fröbel, 1782-1852) は、1840年、ドイツに世界で最初の『幼稚園』(Kindergarten キンダーガルテン=子どもの庭) を創設したことで「幼稚園の父」と呼ばれてきた。実は、フレーベルはその幼稚園の創設に先立ち、家庭や保育所・幼稚園で乳幼児と母親・保育者が共に遊び、育む「教育遊具(教具)」(以下、「教具」と表記) を早くから考案し、子どもの自主性を育む人間教育の原則を探求し、それを理論的にも、実践的にも解明し、晩年にいたるまで教具を考案し続けた。つまり、フレーベルは、保育所・幼稚園という教育(保育)的「場所」(空間)の創設以前からその場所で使用する教材、つまり、「教具」を考案し、それを、家庭、幼稚園で活用させることによって初めて自立的で、自由な人間教育が可能になると考えたのである。このような独創的な取り組みは、19世紀の母国ドイツだけではなく、以後、日本を含めて全世界の幼児・保育教育に大きな影響力を与えてきたのである。なぜ、フレーベルは「遊戯」を家庭や幼稚園教育の基本にしようとしたのであろうか。なぜ、文字によらない「教具」(教える道具)による人間教育を考えたのであろうか。

このような基本的な問題については、論者はすでに『広島文化学園短期大学紀要』(第42号、2009年)において「新しい資料の解説によるフレーベル「教育遊具」の体系的考察-資料批判と今日的課題」のテーマで、さらには本研究センター『年報』の第1号(2011年)で「フレーベルの「遊戯」

と「教育遊具(教具)」のタイトルで、新しい諸資料の考察から教具の体系性とその全体像を中心に考察し、「フレーベルの発達の・教育的遊具の体系」(図1)として公表し、あわせて、家庭や幼稚園の教具として、特に、フレーベル遊具として有名な「恩物」(第1恩物から第6恩物)を考案した資料の解説を中心に紹介した。

さらに、『年報』第2号では、そのフレーベルの「教育遊具」の出発点でもあり、同時にフレーベルが最後に到達した家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』を取り上げ、実践の手引き(1)として考察した。ここでは家庭や保育所・幼稚園、さらにはその接続学校(施設)や小学校で活用する方法を説明し、具体的に、子ども・子育て研究センターで活用する『遊具』の事例を提示し、説明した。特に広島文化学園大学学芸学部は子ども学科と音楽学科で構成されているので、「音楽」(メロデー)に係わる活動が可能であり、またそれは本学部のおおきな特徴と考えたからである。

今回の論究はこれら3回の考察をもとに、特に、フレーベル『教具』の中でも「作業具」の使用方法を中心に考察する。一般に、フレーベルの『教具』は、「恩物」(Gabe; ガーベ)と「作業具」(Beschäftigungswerkzeug)に二分されるが、『遊具』を「遊びガーベ(恩物)」(Spielgabe)と表記されることから、両者の「区別」があいまいなまま、特にわが国ではアメリカからのフレーベル式遊具が関信三によって1878(明治11)年「20遊戯」として両者を一体化して紹介された。この「誤解」は驚くべきことに、日本とドイツのフレーベル研究者によって1996年5月3-5日に開催され

た『日・独フレーベル国際会議』（ドイツ・バートブランケンブルク／フレーベル博物館にて開催、第2回以降「国際フレーベル会議」に改称）において日本のフレーベル研究者、荘司泰弘による「日本におけるフレーベル式遊具受容の誤形式 (Fehlformen der Rezeption der Fröbelischen Spielmittel in Japan)」の発表において初めて指摘、論証されたのである。さらに驚くべきことは、120年前「誤解」のまま受容された『フレーベル式遊具』は現在でもわが国では広く幼児教育界で「誤形式」のまま流布しているのである。

最近論者は、京都市学校歴史博物館『常設展示開設図録』（京都市教育委員会 京都市学校歴史博物館編集、平成21年3月31日）を手にして驚愕した。幕末の学校から明治・大正・昭和初期、戦時中の教育、戦後の教育と教科書の変遷ともども写真入りで、実に貴重な資料が収録され、教育の歴史を具体的な教具、教材を通じて『語る』その先見性には瞠目しているのであるが、幼稚園の教育玩具（恩物）として第一恩物「六球法」から第十九恩物「豆工法」（まめざいく）までカラー印刷で収録し、それぞれに「フレーベルによる二十恩物の一つ」と丁寧解説されているのである。掲載されている第七恩物「設板法」（いたならべ）から第十九恩物「豆工法」（まめざいく）までは明らかに「作業具」でフレーベルの「恩物」ではないのである。ここでも明治初期、アメリカからの輸入本からの関信三による『幼稚園記』の翻訳本の「誤解」がそのまま継承されているのである。

これらの諸点を考慮して、今回の考察では、資料の正確さや現代のフレーベル幼稚園の実践のあり方について注目しながら、フレーベル式方法を基本としながらもフレーベルの愛弟子たちが考案した「教具」、特に「作業具」を具体的に展開している幼稚園の記録、すなわちフレーベル幼稚園の発祥の地であり、原資料を保存しているバートブランケンブルクの「フレーベル幼稚園」の実践記録とも言うてもよいフレーベル館長、M. ロックシュタイン著『キンダーガルテン（幼稚園）』（Margitta Rockstein, "KINDERGARTEN", 2013.）を使用文献として、「教具」、とくに「作業具」の説明を中心に論を進めたい。なお本著は、1999年に「フレーベル博物館叢書」第1巻として刊行されたが、現

在の幼稚園活動のありかたを特に重視して、2013年5月に改訂新版としてカラー印刷による大変きれいな魅力的な版として刊行された。

具体的な「教具（作業具）」の使い方を説明する前に、フレーベルの「遊戯」と「教具」についての基本的な考え方を『紀要』『年報』論文を一部再収録して今一度整理しておきたい。（以下、「遊戯」とか「遊び」と表記される言葉はドイツ語 das Spielの訳語で必ずしも統一されていない。）

1 遊戯の考え方

第一は、子どもの「遊び」とは、「子どもの心の奥底にあるものを、現実に表現するためには、からだの動きを通して、私たちの日常生活の中に、目に見えるように表わさなければならない」ということである。端的にそれは子どもの「自己活動」としての「遊戯」である。

第二に、この「自己活動」は、子どもの生命の発達、すなわち、乳児期、幼児期、少年期等によって「質的」に異なるものと捉え、各時期を「内と外」との関係で把握している。具体的には、1. 身体的な、あるいは聴覚の練習遊び、色彩遊びのような視覚を訓練する遊び、2. 感覚的な遊び、思考や判断力を要する遊び、3. 数や図形のような知的な遊びのいずれかである。

第三は、遊びには「精神と心情と身体とを発達させ強くする力」があるということである。特に、子どもたちが戸外でいろいろな遊びをする場合、例えば、集団遊びの場合、その遊びを通じて友達同士が手をつなぐことから得られる「共通性（みんな同じだ）」と「差異性（異なり）」を習得する。同時に、また「遊び」を通じて子どもたちは、「遊び」自体のもつ「ルール」や遊びの際の「ルール」、例えば、滑り台のもつ高い所から低い所への「滑り」の法則や滑る順番の「決まり」等、広く物事と人間関係のもつ「法則性」を「予感（なんとなく感じる）」することになる。この遊びのもつ「ルール」感覚の習得ということは、晩年フレーベルが特に強調した点である。

このことは子どもの「遊び」と大人の「遊び」とが全く違った意味をもつことを意味している。つまり、大人がゴルフ等に興じることは本質的

に異なるということだ。

このようにフレーベルはあらゆる真の人間形成の基礎、基盤は、衝動を基礎とする諸「活動」に基づくものと考えた。つまり、乳児期、幼児期のごく早い時期に、活動そのものである遊びによって本当の人間形成が始まることになるということである。その際とくに重要なことは、人間の最初の教育者である子どもの両親、保育者、特に母親や保母さんに、子どもの遊びを大切にするように、フレーベルは強く説いた。それは「子どもの頃の遊びは、——（略）——くだらない戯れではなく、真摯に受けとめなければならないような深い意味をもっている」からである。

2 教具の考え方

フレーベルの考えでは、子どもの発達段階に即して、遊びを考察し、その子どもの成長・発達を促す教材を考案するということである。具体的には、フレーベルは、子どもの生命の発達を乳児期、幼児期、少年期等、いわゆる子どものそれぞれの発達の段階を質的に異なるものととらえ、その各々の時期にふさわしい遊びを導く、あるいは遊びを活性化する「教具（教材）」を考案するということであった。しかも、フレーベルは子ども達と共に、一緒になって遊ぶことによって、子どもの成長・発達を観察し、よく考えて、それにふさわしい『遊具』の全体像を一生考え続けたのである。

このフレーベルの子どもと一緒に遊ぶという実践から得られた「教具」の考え方からもわかるように、「教具」と「玩具（おもちゃ）」とは根本的に違うということだ。一体、子どもが手に持って遊べるように作られた「おもちゃ」、「玩具」は、子どもの発達の相や時期を考慮して子どもの全体的な活動を促すという考え方からつくられているだろうか。子どもの内面の活動を導き、強化するものなのだろうか。そして何よりも重要なことは子どもが手にする「玩具」は体系をもって子どもの発達を促すものなのか。多くの疑問がある。（最近、ドイツや北欧の大きな本屋では広く「子どもコーナー」が設けられ、子どもの発達段階ごと（例えば、三歳、四歳、5歳等）に絵本が配置され、幼児（教育）の専門家が、店員として絵本選びの相談に与っ

ている。無論、日本の任天堂の玩具も置かれているが——。）

それでは最初に、フレーベルの発達の・教育的遊具の体系図（全体像）を示し、子どもの発達の段階に即した「遊具」の具体的な説明に入りたい。

[図-1 フレーベル「教具」(恩物、作業具)の体系]

フレーベルの「教育遊具」は大きくⅠ. 家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』（1844年）、Ⅱ. 遊具手段としての狭い意味での「恩物」と「作業具」から構成された「教具」、そしてⅢ. 運動遊戯の三部から構成されている。その際、フレーベルの教具が、時計文字Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの順序で考案されたのではなく、つまり子どもの成長・発達の順に考案されたのではなく、スイス時代（1832-36）のフレーベル自身の養護施設での実践活動からⅡの教具（一般に「恩物（ガーベ）」と呼ばれる「教具」）をまず考案され、次に、フレーベルのスイス時代（1832-36）、フレーベルを支援するためヴェリザウ学園に赴いてその後、ブルクドルフ孤児院の設立、運営にあたった弟子のハインリヒ・ランゲタール（Langenthal, Heinrich. 1792-1879）の発案（創作）、実践によるⅢ. 運動遊戯に至り、その上で、長い間の思索と多くの困難を経ながら、出版業者ヨーゼフ・マイアーの意見を入れて作成された晩年の1844年に刊行された家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』である。本書はフレーベルの遊戯論の集大成であると共に当時のヨーロッパにおける最高傑作の育児書と考えられているものである。これを見てもわかるようにフレーベルの遊具が理論の応用から生まれたものではなく、逆に、子どもの動きを見ながら遊具を実際に使用していく実践の中で、一つ一つ考案され、製作されたことが明らかになる。

1) フレーベルの教育遊具

フレーベルの教育遊具は、四つのグループに区分される。具体的には、立体の教育遊具と平面の作業具、扇形の作業具と点の形をした作業具である。

これらの材料の分解と統合によって、子どもはフレーベルの考えの基本である「球体法則」（注）を「予感」することになると考えられている。そ

れを子どもは遊びのなかで、傍にいるおとな（保護者や保育者）に寄り添いながらこの法則をゆっくりと意識するようになる。方法としては、教具の使い方は、まず、「立体」が用いられ、それから「平面」へ、「線形」を経て、「点」へと進み、その後、再び、「立体」の教育遊具へともとの所に帰る。

（注）「球体法則」とはフレーベル教育学の哲学的基礎で『自然と人間の生命のあらゆる現象が『球体』的に表出しているという思考。（すべての現象や存在は球体の中心点（ゼロ）から+（プラス）と-（マイナス）の両方向に同距離、同質で示されるという。人間の場合、男性と女性、動植物における雄と雌、あるいは物理学上の『力』等において表出されるという考え方。この思考はさらに「生の同一（Lebenseingung）」思想として展開する。

[図-1 フレーベル教具の体系の分析過程と総合過程を参照]

a 立体の教具

立体の教具に関しては、すでに『年報』第1号（2011年）で（1）第一恩物 ボール、（2）第二恩物 木製の球と立方体、そして円柱の三つの立体のセット、さらに第三、第四、第五、第六恩物を説明した。従って、以下、フレーベル博物館にならって子ども・子育て支援研究センターのプレールームで利用可能な「平面」「直線」「点」の教具について説明する。

b-1 平面の作業具

平面の作業具には、木製の色板があげられる。

[図-2 色板遊び]

正方形を対角線にそって分割すると、直角二等辺三角形ができる。フレーベルの時代には木製の板は赤や黄色、緑に塗られていたが、その後、色々な色と形の板が作られるようになった。長方形、直角三角形、三辺の異なる三角形、正三角形、鈍角のある三角形、ひし形、円状、半円状・中心核が90度のおおぎ形の板など、これらを組み合わせることによって子どもは子どもの日常世界を作り、〈生活の形〉・〈美の形〉・〈認識の形〉を組み立てる。

b-2 平面作業具の一つとして「折り紙」や「切り絵」も考えられる。

[図-3 やさしい折り紙の形—生活の形]

この作業具も正方形から始まる。これは、フレーベルが特に「四分分割されたもの」と呼ぶものである。紙を折っていくと平面の形や立方体の形が現れてくる。こうした形を作るには、厳密さと正確さが必要で、大人の手助けが必要になる。折り紙の大きさは、フレーベル式では10cmより小さくてはいけないことになっている。それは子どもの手仕事を考えての決まりだ。折り紙を折っていくうちに、正方形—四角形—三角形の間の幾何学上の関係が折る動作の中ではっきりとわかる。このようにして出来上がった形は、年少の子どもたちにはその子どもたちがよく知っているものになぞらえて、名前をつける。たとえば、三角形を「スカート」といったように。フレーベルは、〈生活の形〉・〈美の形〉をつくるために、単純に折ることを推奨している。フレーベルは、晩年、「折り紙の手引書」と題する論文を『週刊誌』に発表し、折り紙遊びのもつ幾何学的意味やその教授学的重要性を述べている。日本古来の「折り紙」を使った遊び（作業）はもっともっと活用されるべきである。ただその際、子どもにとって「折り紙」の作業（遊び）が子どもの何を発達させるのか、その科学的知見を保育士・保護者達は十分知っていることが重要である。

折り紙遊びの眼目は、一般に言われているように、指先の器用さを養うことと同時に幾何学的な意味、例えば、形の対称性や形の多様性を身につけることである。

[図-4 単純な折り紙の形—〈生活の形〉]

[図-5 折り紙の練習—〈美の形〉と〈生活の形〉]

[図-6 切り紙の練習—〈美の形〉]

c-1 直線の作業具

直線の作業具のグループには、細い木製の棒や紙テープ、薄い木の板を交錯させたものや直線を描くことなどがあげられる。細い木製の棒は予想以上に多くの使い道がある作業具である。木製の棒は日常の生活場面を表現する際、様々に使うことが可能で、M. ロックシュタイン女史は「お話をしながらの棒遊びは、大変有意義」と述べている。子どもが今作っているものについて、言葉で

表現できることが大切なことなのである。長さの異なる細い棒を使うことによって子どもは広がりや長さの関係がわかるようになる。〈認識の形〉に子どもが気づく遊びとして、棒の数を数えながら遊んだり、年長の子どもなら、文字の形に並びかえたりする遊びも考えられる。いずれにせよフレーベルは、棒を並べることを「何かを描く準備段階」と考えていたようである。従って、次の円や曲線を描くことは、この作業具を用いた遊びを欠いてはできないのである。

フレーベルの死後、彼の後妻のルイゼ・レヴィン (Louise, 1815-1900) は金属で作られた直径2.5 cmならびに4 cmの輪と半円を作り手引書も付けて紹介している。フレーベル自身は1852年、『フレーベルの努力のための雑誌 (Zeitschrift für Fröbels Bestrebungen)』において、木の棒にかんする未完成ではあるが、論文を公表している。また、1852年に刊行されたヨハネス・シュタンゲンベルガーの小冊子『木の棒で遊ぼう—初等学校に入学した子どものための棒遊び入門』に、フレーベルは序文を書いているのである。このことから判るように、フレーベルは、棒を使って描く線画を特に重視していた。

フレーベルは、論文「子どもが線画を描く楽しみ」において、思い描いたり、形を作ろうとしたりする子どもの意欲を母親や保育者が伸ばすように配慮することが大切だ、と述べている。またフレーベルは、世の母親、保護者に「子どもにまず棒を一本用意してください、そして地面や砂地に円や線を描かせてみて下さい」と訴えている。その際、おとなが詩や歌を口ずさむ、あるいは一緒にあそぶことが、子どもに寄り添うことになる、とフレーベルはいう。そのことによって子どもは、自分で作業具を使うようになるというのである。ここには1832年からのスイスにおける活動、特に、ブルクドルフにおける保育実践を通じたフレーベル自身の子どもの「遊び」の体験が背景を形成している。

フレーベルは線画の分野で子どもの能力や技能を伸ばすために、方眼の下敷き用紙を作る。この方眼用紙を使って、子どもは「自分で創作しながら」、垂直線や水平線、斜線や曲線を頭に描きながら、自然界の姿や身の回りの物の長さを計れるようになり、また生き生きとした絵を描けるよう

になる、という。さらに、描いた形に色をつけることによって、線画を描く子どもの美意識が高まることにもなる。

[図-7 棒並べ—〈美の形〉と〈生活の形〉]

[図-8 輪並べ—〈美の形〉と〈生活の形〉]

紙テープの編み方については、フレーベルは簡単な手本を残しているにすぎない。むしろフレーベルの弟子たち、たとえば、エレオノーレ・ヘールヴァルト (E. Heerwart) は年少の子どもを念頭に1 cm幅のテープと木製の棒の利用を推奨している。基本は単純な「数」の組み合わせから次第に複雑な「数」の組み合わせに進み、最後には「自由に編む」段階に至ることである。フレーベルは細長い長方形に切れ目を入れた紙をその台紙に用いたのに対して、弟子のヘールヴァルトたちは、紙テープを通すことによって正方形や三角形、六角形、八角形の形が出来るように穴をあけた台紙を作り、紙テープでの遊びをフレーベルの手本をさらに豊かにした。ただ注意すべきは幼稚園段階でのテープ遊びは簡単な形のテープ遊びだけで、複雑な形では子どもの意欲を喪失させることになる。フレーベルは「かんな屑」を用いて、それを組み合わせたり、編んだりして簡単な幾何学模様を作ることを試みている。それによって、子どもの「目測する力」や手の「筋力」、美的な「感覚」や「思考力」を伸ばすことができた。

その他、紙テープの編み掛け遊びも、直線の作業具である。ただこの作業具についてロックシュタイン女史は幼稚園での実践から「比較的年長の子ども」に向いていると述べている。

この編み掛け分野での作業具については、フレーベルによって養成された幼稚園教師のひとり、ミンナ・シェルホルン (M. Schellhorn) による手法が注目されている。

一般に、シェルホルンは、手遊びの技を発展させ、大成させたといわれているが、それはこの遊びが、特に、幾何学模様の〈認識の形式〉と対称性の〈美的な形式〉を表すことに適しているからである。

[図-9 (a) 編み細工の練習、図-9 (b) 幼稚園での編み細工、図-9 (c) シェルホルンによるレース飾り紐の練習とフレーベル星—編み込みと鑿取の結合]

d-1 点の作業具

「立体から平面」へ、更に「線」をへて「点」に至る最終段階は「点」を形どった「作業具」である。

[図-10 (a) 刺してくりぬく練習、図-10 (b) 縫い物練習、図-10 (c) 点状の作業具一点と線を結ぶ遊び]

この段階の遊びは、穴あけ、あるいは刺して形を描くことである。この遊びのためには、フェルトや針、または厚紙を準備することが必要である。まず縦や横に穴をあける。子どもがそれができるようになれば斜めや丸状に穴をあける。それによって子どもの関心を刺激する〈生活の形〉、たとえば、動物とか花などをかたどることはこの遊び大きな魅力である。〈生活の形〉のモチーフをかたどることは、子どもの発達の程度、発達段階に応じて自由に描かせてもよい。あるいはお手本をなぞらせてもよい。次に、描いた図柄に裏側から針で穴をあける。子どもが図柄を選び、作業を終えてからフェルトないし厚紙を広げてみる。思いどりの形あるいはどのような形になっているかがわかる。

また、あけられた穴に色とりどりの紐を通すこともできる。厚紙に紐を通したりさし込んだりして、線状の材料への移行が完了する。さらなるバリエーションとして、垂直線や水平線、斜線によって、おおきな図案が現れる。この図案は変化しながら、〈生活の形〉あるいは〈美の形〉を表す。

点状の作業具には真珠や豆、小石も含まれる。これらの作業具は他の作業具への移行を可能にする。例えば、真珠に一本の紐を通すことは点から線への移行を示し、細い棒を豆や陶土、彫塑用の粘土と組み合わせることで、再び立体へとつながるのである。それぞれの作業具には多様な組み合わせが可能であり、それはフレーベル作業具の多様性を示すことになる。

子どもたちの一番の関心事、陶土、彫塑用粘土で形をつくることは、フレーベルの作業具の体系の終着点である。子どもは今や自分でリングを作り、水と砂とかき混ぜてケーキをつくる。

M. ロックシュタイン女史は原著の結論として、「フレーベルは自分が考案した教育遊具、すなわ

ち、恩物と作業具を用いて、子どもの中に宿るあらゆる能力を伸ばし、あらゆる才能を発達させることを目標にしていた」。そしてその目標を達成するために「フレーベルにとって、遊具の全体性と体系性とで世界の像（姿）を提示している単純でかつ美的な素材は、子ども自身の手で小さな世界を構築させるもの」と考えられるとしている。

この恩物と作業具によって、子どもは直感的に、世界の構造と法則性とを遊びながら初めて理解することができるのである。

このようなフレーベルの思考や教具の理解は、21世紀に入ってから多くのフレーベル研究者や実践家に共通するものとなりほぼ定説化されてきたところである（この問題に関しては、根本的な問題であるのでまとめの5において再度考察する）。

背景としては、東西ドイツの統合によるフレーベルの「未刊行資料」の保存の集約化がなされ、そこでの「解説」が進捗したからである（ただし「書簡」等のタイプ化はなされたが膨大な『草稿』等は残されたままであるが）。

このような状況をふまえながら、わたしたち大人は子どもたちとどのように向き合えば良いのであろうか。

その一つの方向として、教具を使った遊びについて私たち大人は子どもの遊びを注意深く見つめ（観察し）、愛情にあふれた慈しみ深さを示すこと（理解）は、子どもの自立心をうながすために欠かすことが出来ないのという認識である。このようにして子どもの遊びは、子どもの「心のうちに宿るものを目覚めさせる手段」であると同時に、「外の世界(社会)へつながる鍵」となるのである。大人、特に、保護者、保育に関わる全ての人々と共に、子どもたちの遊びのもつ「力」をもう一度深く考えたい。

まとめ

1 フレーベルの教具中、「作業具」に関しては、多くはフレーベル自身は草稿での解説等を残しただけで、多くはその後、フレーベルの精神を尊重しながら弟子たちによって考案され、具体的な幼稚園の実践のなかで使用され、展開されていった。従って、かなり自由に創作が可能な教具といえる。重要なことは、わが国の明治期に見られた

ようなフレーベル主義に徹した厳格で固い「教具」の使用法ではなく、むしろ今日、日常の生活のなかで使用されている「素材」を利用して、子どもの興味・関心にこたえる「作業具」の考案と使用法が保育者に求められているといえよう。

2 「折り紙」遊びに関して、フレーベルは晩年「折り紙の手引書」(1850年)の論文を残し、折り紙遊びのもつ幾何学的、教授学的面での重要性を強調しているが、「折り紙」作業の幾何学的意義はわかるが、むしろここでは、日本伝統の「折り紙」遊び、たとえば、「鶴を織る」遊びや「人形の着物」を製作する遊び等が推奨されよう。それは子どもの「生活」に接近した遊びであり、「美」の形式の表出であるからである。フレーベルの場合、折り紙遊びが幾何学的な「認識の形式」に重点を置きすぎている。保育施設、幼稚園での「折り紙」作業は、わが国の伝統文化との関連で、もっとももっと推奨され、活用されるべき「作業具」である。刺繍の場合も同様な理解が必要であろう。

3 フレーベルの「作業具」の最終段階としての「点をかたどる」素材があるが、この「素材」は子どもが特に集中する作業である。なかでも穴をあける、紙を刺す作業には子どもの集中力が見られる。トイレットペーパーの一卷きを与えると一時間程度、全身を集中して作業を継続する。子どもが「集中する快感」を会得させる「作業具」の考案が重要だ。

4 全体的に、フレーベルの「作業具」に関しては、<生活の形式><美(的)の形式><認識の形式>の三者がつねに考慮されているが、三者の関連という面から言うと<認識の形式>の観点がその「核」となり、強調されているように思念される。むしろ、現代では子どもの「(日常)生活の形式」が重視されるべきであろう。

5 最後の問題は、フレーベルの考案した「恩物」と「作業具」、すなわち、「教育遊具」がその全体性と体系性とで世界の像(在りよう)を再現しており、それと向き合う子どもに自らの手で小さな「世界を構築」させる、という命題である。そして「遊び」が両者を仲介するメディアであるということである。

この難題はフレーベルの思考の中核であり、極めて抽象的な考察となっている。フレーベルによる上記の遊戯と作業具の「全体性」と「体系性」

を示唆した資料は今日「草稿」として残されている。ドイツ陶冶史図書館(BBF)所蔵の文書室(Archiv)「フレーベル遺稿、57, 3」(BBF/PIPF/Archiv, Nachlass, Fröbel 57, 3)がそれであるが、今回、当館館長並びに古文書専門家の好意で、「学術コピー」として二葉の複写で入手出来たのでその一葉について簡潔に図像学的視点から「解説」する。

[図-11 フレーベル遺稿、57, 3]

教具の全体性と体系化に関するフレーベルのこの直筆草稿から図像的には子どもの頭(大脳等)がイメージされないだろうか。基本的には、この図像は、「球体法則」から導かれたものであろうが、子どもの像(頭)を限りなく『球』に近い形体の完全なものとして表現され、それとの関係で自然の形に基づく教具が体系的に示されているのである。子どもの「頭」と「教具」が生命体的に「合一」していることが重要である。

なお、本フレーベルの草稿は、1982年、フレーベルの生誕二百年を記念して旧東ドイツの教育科学アカデミー(APWA)所有の資料からアカデミー総裁K.H. ギュンター教授の指導の下に、R. ボルト、E. クネヒテル、H. ケーニヒの編纂で1986年に『F. W. A. フレーベル、さあ、私たちの子どもたちに生きようではないか!』の三巻本として刊行された第三巻に、未刊行の「Fr. フレーベルによって今迄に作成された遊戯-作業具および手段の一般的概観」と「今迄に獲得された建造、平面、造形遊戯の関連の概観」のタイトルで二様の「複写」が掲載されている(第三巻、49頁)。そしてこの二様の「複写」がタイプ化され付録として巻末のポケットに四つ折りで挿入されている。極めて不鮮明な複写であることと巻末のポケットに挿入されていることからなかなか目につかないオリジナル資料であるが、両「概観」からは、フレーベルの『遊具手段・作業具』の多様性がどのようなものであるのか、あるいはその体系化を理論的に徹底的に追及したフレーベルの遊戯・遊具に関する始原的な資料として極めて重要である(第三巻、280頁参照)。

本論文に掲載された「複写(画像)」は「今

迄に獲得された建造、平面、造形遊戯の関連の概観」であるが、以下、簡潔に図像学的に説明する。

顎から頭部全体にかけては「球によって導かれたような球体的なものと位相的に平面的な分節との結びつきを導き、両者は再び円筒と結合し、割石のような形体の縁と曲線的な枝との全体的な連結のようなもの。これらの結びつきは一連の新しい生活の形式、認識の形式、美的形式を与え」とりわけ、「全く新しい運動、メカニズム」をあたえる、と記されている。

頭の中心部に太字で「Ball (ボール)」が書かれているが、それが「第一恩物」、そこから口のような「第二恩物」の「球」と「立方体」が、そして「球」と「立方体」を真に結びつける形として「円筒」形が示されている。

この「立方体」から分割されて、A. 立方体的な部分として「第三恩物」が、B. 積み木の部分として「第四恩物」が、C. 平面的な部分、D. 棒状、E. 点、F. 棒状くり形、G. 平たいものに分類され、図像の肩の部分を作している。

さらにフレーベルはこの図像の脳の部分に注意書きを施している。「色彩」「音」「ことば」のそれぞれの遊びは固有の法則から発展する、と記している。ここには1844年の『母の歌と愛撫の歌』の構想が示唆されている。

運動遊戯は子どもにとって、二重の出発点があると記し、「ボール、球・・・、そして子どもから」、すなわち子どもの四肢の構造に依って(遊戯が)形成され、さらに続く」としている。ここには子どもの四肢の構造と遊具の構造の『合一』というフレーベル教育学の法則が指示されているのである。

参考・引用文献

(本『子ども・子育て支援研究センター年報』では執筆要綱において注及び引用・参考文献の形式が規定されているが、図の掲載によって本稿はすでに、規定の分量を超えているので、簡略化して、一括して記載する。)(順不同)

1) Margitta Rockstein, KINDERGARTEN, Bad Blankenburg, Friedrich-Fröbel-Museum,

2013.

- 2) 小笠原道雄論「新しい資料の解説によるフレーベル「教育遊具」の体系的考察」、所収：広島文化学園短期大学『紀要』、第42号、(2009)。
- 3) 小笠原道雄論「子ども・子育て支援研究センターで活用するフレーベルの「遊び」と「教育遊具(教具)」についての考察－その体系的性を考慮して－」、所収：広島文化学園短期大学『子ども・子育て支援研究センター年報』、第1号、(2011年)。
- 4) 小笠原道雄論「子ども・子育て支援研究センターで活用するフレーベルの「遊戯」と「教育遊具(教具)」－実践への手引き(1)：家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』－」、所収：広島文化学園短期大学『子ども・子育て支援研究センター年報』、第2号、(2012年)。
- 5) 小笠原道雄『フレーベルとその時代』、玉川大学出版部、1994年。
- 6) 小笠原道雄『フレーベル』、清水書院、2000年。
- 7) R. ボルト／W. アイヒラー著、小笠原道雄訳『フレーベル、生涯と活動』、玉川大学出版部、2006年。
- 8) H. ハイラント著、小笠原・藤川共訳『フレーベル入門』、玉川大学出版部、1991年。
- 9) Helmut Heiland, Die Spielpädagogik Friedrich Fröbels, Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1998.
- 10) Bruno Hanschmann, Friedrich Fröbel. Die Entwicklung seiner Erziehungsidee in seinem Leben Eisenach, 1875.
- 11) August Kohler, Die Praxis des Kindergartens. Weimar, 1874.
- 12) Eleonore Heerwart, Fröbel's letztes Lebensjahr-Tod und Beerdigung, Eisenach, 1902.
- 13) Friedrich Fröbels Wochenschliff, Bad Liebenstein, 1850.
- 14) Redigiert von Bruno Marquart, Zeitschrift für Friedrich Fröbels Bestrebung zur Durchführung entwickelnd-erziehender Mensch enbildung in allseitiger Lebenseinigung. Bad Liebenstein 1851-1852.
- 15) F. W. A. Fröbel・KOMMT, LASST UNS

UNSEREN LEBEN! · Band III(Hrg. K.-
H. Günter/H. König), Volk und Wissen
Volkseigener Verlag, 1986.

(本研究は、日本学術振興会科学研究費（科研費）

学術研究助成基金助成）（基盤研究（C）、平成24
年度－26年度）による「スイス時代の未刊行資料
の解読によるフレーベル幼児教育思想の形成と展
開の研究」の研究成果の一部である。）

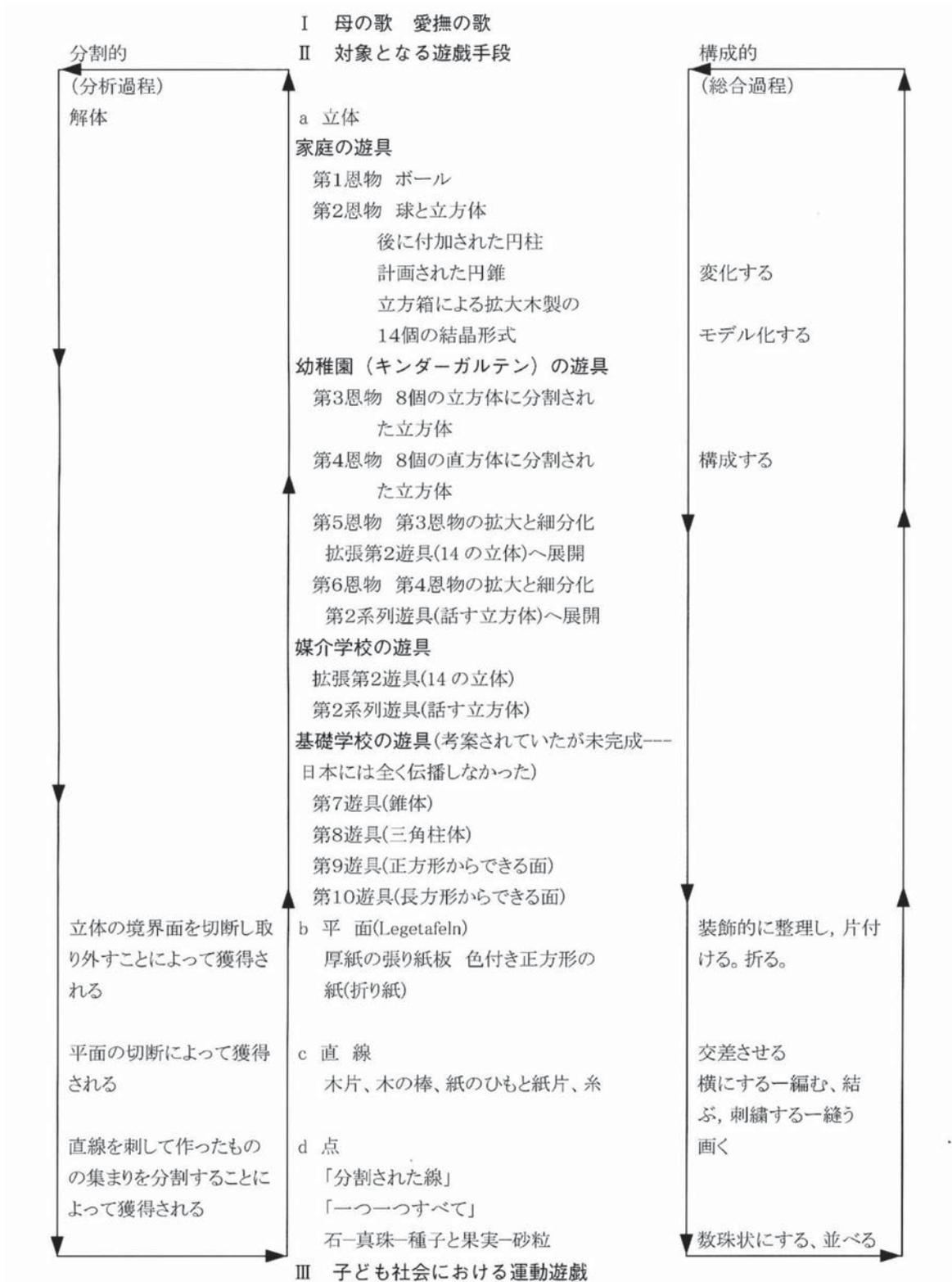
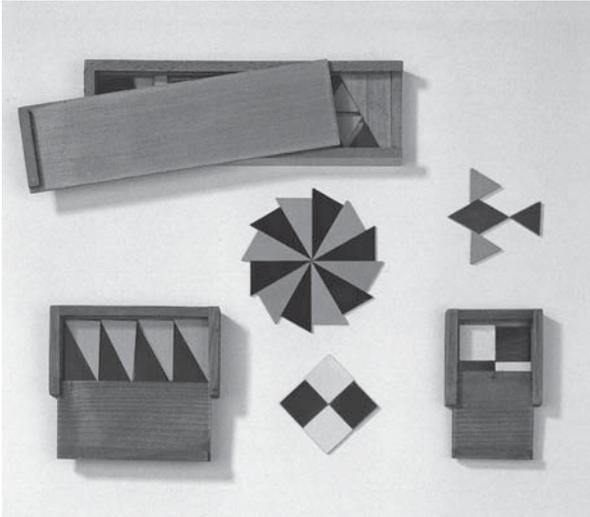


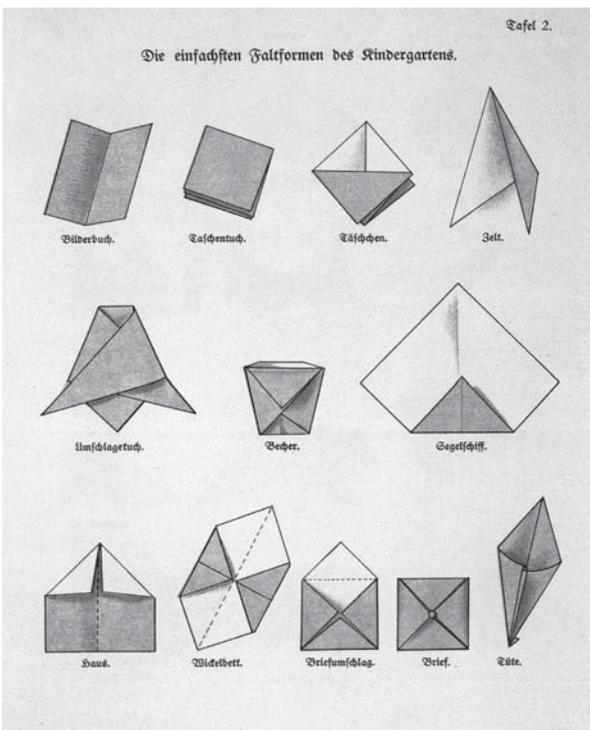
図1 フレーベルの発達の・教育的遊具（恩物）の体系



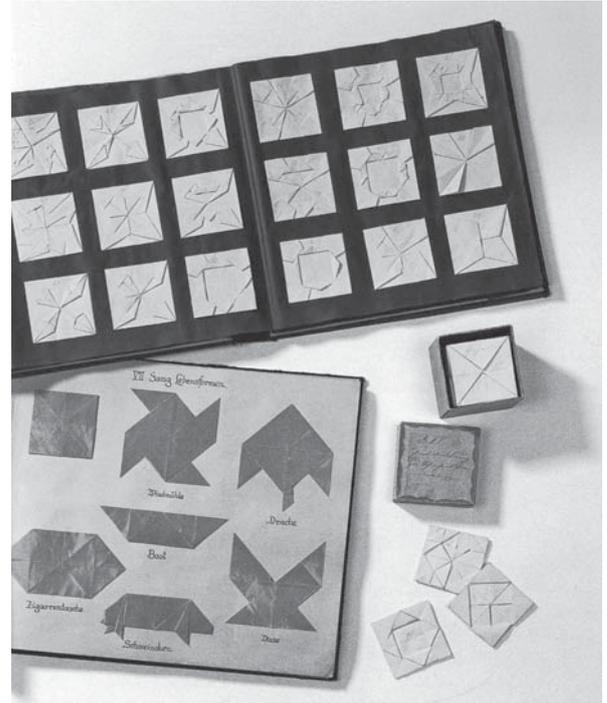
[図-2 色板の箱]



[図-3 色板遊び]



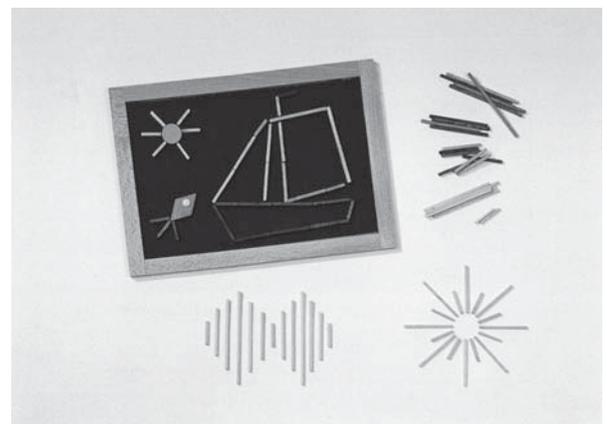
[図-4 幼稚園での単純な折り紙の形]



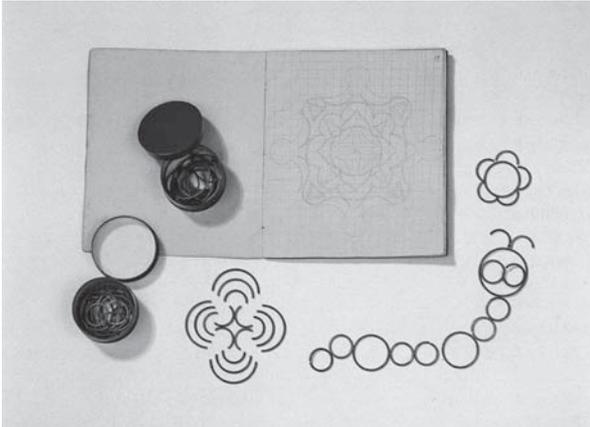
[図-5 折り紙の練習-〈美の形式〉と〈生活の形式〉]



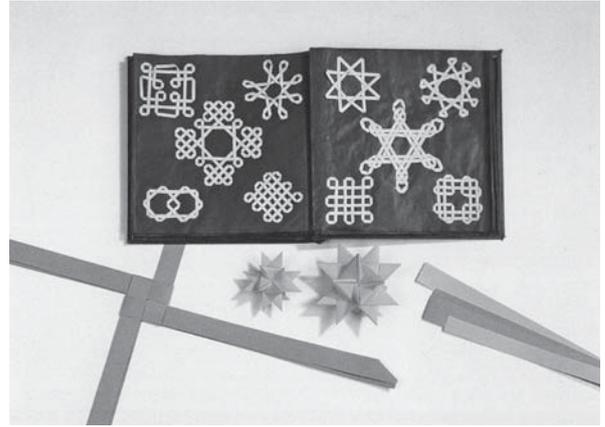
[図-6 切り紙練習]



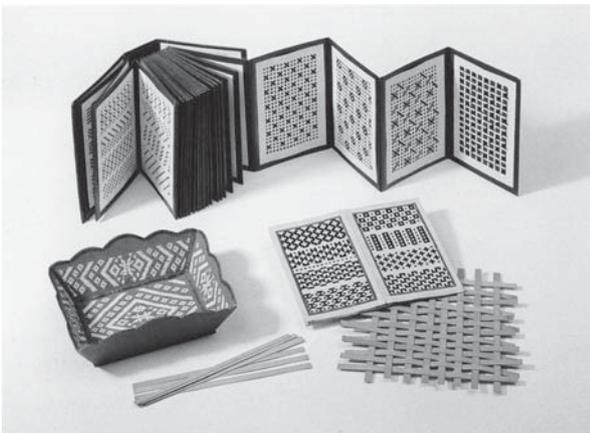
[図-7 棒並べ-〈美の形〉と〈生活の形〉]



[図-8 輪並べ<美の形>と<生活の形>]



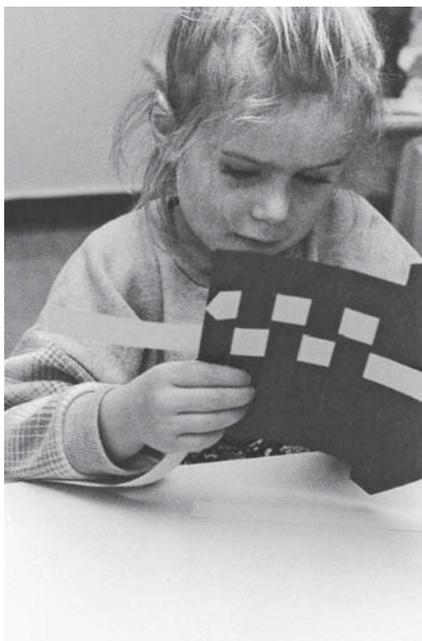
[図-9 (c) シェルホルンによるレース飾り紐の練習と
フレール星-編み込みと襲取の結合]



[図-9 (a) 編み細工の練習と交差編みの木片]



[図-10 (a) 刺してくり抜く練習-<美の形式>
と<生活の形式>]



[図-9 (b) 幼稚園での編み細工練習]



[図-10 (b) 縫いもの練習-<美の形式>
と<生活の形式>]

